



人と出会う、本と出会う

人間の愚かしさを描く

おおくらりゅうきようげん かた やまもと とうじろう
大蔵流狂言方 山本 東次郎

平成17年度版「国語」六上「狂言 柿山伏」

八年にわたり、横浜能楽堂主催「こども狂言ワークショップ」の講師を務め、子どもたちに狂言の魅力を教えていらっしやる、大蔵流狂言方の山本東次郎さんにお話を伺いました。

「こども狂言ワークショップ」には毎年大勢の子どもたちが応募してくださいます。大人は、狂言は子どもには難しいと思いますが、それは大人の思い込みに過ぎないようです。狂言は室町時代から江戸時代にかけての話言葉で作られていますから、大人でも耳慣れない言葉がたくさんあるでしょうけれど、わからない言葉に対して、小さいお子さんほど柔軟に反応してくれるのです。

「最初は何を言っているのかわからなかったけれど、動作を見ていると、だんだんわかるようになってきた。きっとこんなことを言っているんだろうと想像できるようになって楽しくなった。」

小・中学校の狂言鑑賞教室では、しばしばこんな感想文が寄せられます。また、狂言を稽古する子どもたちは、この難しい言葉を自然に耳で覚え、生き生きと楽しそうにセリフを口にします。子どもには大人のように、狂言は古典だからという意識はないのでしょうか。すべてが未知の世界である子どもたちにとっては、狂言も他の演劇と同様、ひとつのパフォーマンスに過ぎないのかもしれない。だからこそ、構えることなく、見たまま聞いたままを素直に受け入れることができるのでしょうか。

入り口はそれでいいと思います。しかし、一歩踏み込んだら、狂言は、西洋や現代の芸能とは違って、古くから日本人が大切にしてきたことを大事に受け

継いで、舞台の上に残している芸能であることを理解していつてもらいたいと考えています。

狂言は暴力をどう描くか

現代と古典では、作り手の表現方法が大きく違ってきます。そのため、なじみにくいこともあるかもしれません。例えば、今のテレビや映画の暴力シーンは、たいへん迫力があります。殴られた人が吹っ飛び、顔は腫れ、唇が切れて血が流れる、ほんとうらしく見えることが大事なのです。

狂言は、それとは正反対の考えで作られています。「末広」という曲では、太郎冠者の失敗に激怒した主人は、「あっちへ失しよう！」と声を張り上げながら扇を幾度も振り下ろし、最後に、ドンと一ツ足拍子を踏みます。すると、太郎冠者は橋掛りに逃げて行つて、トンと片膝を着きます。

いったいどういう意味なのか、おわかりになるでしょうか。これは、主人が太郎冠者をさんざんに叩きのめし、最後には家から蹴り出した、そして太郎冠者は地べたに倒れ込んだ、ということなのです。しかもこのとき、二人はメートルも距離をおいて演じています。殴られるどころか、からだに触れもしません。リアルな暴力シーンに馴染んでしまった人たちの目には、ひどくつまらないものに映るかもしれません。

これが昔の人と現代人の考え方の違いです。暴力は醜いもの、汚らしいものです。できることなら、そのようなものは人様のお目に掛けたくはない。しかし、狂言では人間の愚かしさをテーマに据えています。当然、暴力の場面も必

山本東次郎（やまもと とうじろう）

1937年、東京生まれ。

狂言師（大藏流）、日本能楽会会員。

昭和17年「癡痺（しびり）」のシテで初舞台。27年「三番三」、33年「釣狐」、46年「花子」を披く。47年5月、四世東次郎を襲名。

平成4年度芸術選奨文部大臣賞、平成6年度観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成10年紫綬褒章、平成13年エクソンモービル音楽賞（邦楽部門）をそれぞれ受賞。

主な著書に、『狂言のことだま』『狂言のすずめ』（玉川大学出版部）など。



要になります。それならば、それは最低限でいい、暴力がふるわれたということがわかればいい、それを舞台の上で強調して見せる必要はない、ということなのです。

「附子」という曲では、最後のほうで、太郎冠者と次郎冠者が主人の大事にしている掛け物を引き裂き、天目茶碗を叩き割る場面が登場します。「さらりさらり、ぱったり」「がらり、ちーん」、掛け物が破れる音、茶碗が割れる音、たいへん楽しく表現しています。これを「笑いを取るためにそうしているのだ」と思われる方、「子どもだました」と思われる方も少なくありません。

しかし、そうではないのです。価値ある物が壊れることは、心ある人にとっては気持ちのいいものではありません。不快な思いを与えぬよう、そういうところは遠回しに描こう、という配慮なのです。他愛なく見せながら、深いところでそうした心くばりがなされている、これもまた昔の日本人の考えなのです。

人間の愚かしさを描く

人間はいつの時代にも変わることはありません。どれほど科学技術が発達し、快適で便利な生活ができるようになって、人間が賢くなつたわけではありません。欲望に憑かれた人間、傲慢な人間、憎み合い殺し合う人々もあとを絶ちません。狂言はそんな人間の愚かしさを描きます。しかし、それを決して「事件」にして演じることをしません。劇的な事件に仕立てたほうが、ハラハラ、ドキドキ、おもしろく見ていただけるのですが、あえてそれをしないのです。「事件」とは、ある特別の人が行き着いてしまった果ての姿です。それは「対岸の

火事」、「他人事」です。観客は、ただ傍観者として眺めることになります。

生きている限り、だれの身にもさまざまな問題が起こります。対処のしかたはそれぞれ異なるでしょう。欲望や利己心を克服し、あるいは上手に立ち回り、なんとかうまく切り抜ける人もいれば、判断を誤ってしまふ人もいます。しかし、人間とは一なるものです。困難が生じたとき、だれでも皆、最初に考えるのは同じことではないでしょうか。狂言が描くのはその芽の部分です。事件になる一歩手前、おおよそ人間だったらだれにでも起こり得ること、それを自分の身に置き換えて、自分を振り返りながら、「ご覧いただきたいと思つのです。狂言は決して人間を糾弾したり、追い詰めたりたいしません。この愚かしい人間があるがままに見つめ、温かく見守っているのです。

現代の日本人は穏やかなものを好まず、過激なもの、強烈なものを求めます。しかし、そうした刺激は必ず慣れがきます。初めは非常に刺激的だと思われていたものが、いつの間にか感覚が麻痺し、当たり前のようになっていく、そしてさらに強い刺激を求めるようになります。善悪の判断もできない幼いうちから、子どもたちがそうしたものを見聞きして育っていくのは恐ろしいことです。現代の表現者たちは、受け取る側の知性、感性、教養、美意識、それらを無視して、作り手が一方的に自分たちの自己主張を押しつけます。それに対して日本の古典は、受け手に向かって打って出ることをしません。想像力を働かせ、心のなかで自由な世界を展開してもらつこと、そのために余白を残し、簡素で控えめな表現に徹します。受け取る側の人々が気がついて、近づいて来てくださるまでじっと待っている、これも人間に対する優しさ、思いやりにはかならないと思います。